
東方夢遊伝

ぷるたぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢遊伝

【Nコード】

N9787I

【作者名】

ぶるたぶ

【あらすじ】

風見元春^{かざみ もとはる}が起きたとき、そこには見知らぬ土地が広がっていた。一方、博麗神社の巫女、博麗霊夢とスキマ妖怪、八雲紫は幻想郷のとある異変に気付いていた。

夢と現実が入り乱れるこの世界で、風見元春の大変な非日常が始まる――

本作品は東方projectの二次創作です。初投稿なのでキャ

ラ崩壊や、食い違いが多々あるとは思いますが、暖かく見守ってやってください。

プロローグ（前書き）

物語は風見元春が幻想入りするところから始まります。

まだまだ未熟者ですが、読んだら感想、アドバイス等よろしくおねがいします。

プロローグ

不思議な夢を見た。

上下左右、全てが真っ白な空間に大量のシャボン玉。

僕はその不思議な光景に魅入られながらも、ただぶかぶかと浮いていた。

シャボン玉は漂いながらお互いにぶつかって割れたり、ひつつき合ったり、ひとつの大きな玉になったりしていた。

そのひとつひとつの変化を見ればゆっくりとしたモノであったが、空間全体を見渡せば目まぐるしくこの世界は変化していた。

永遠に白とシャボン玉のみが続くこの世界で夢の中の僕は突然ある方向へ向かって動きはじめた。僕を後ろから見ている自分自身、どこへ向かっているのか分からなかったが。シャボン玉の間を縫い、長い長い時間がたって、たどり着いたその先には、やはりシャボン玉しかなかった。

しかし夢の中の僕が見ていたのは、無数にあるうちのただ一つのみ。他と全く変わらない（ように見える）そのひとつのシャボン玉の前で夢の中の僕は立ち止まっていた。

本当に何の変哲もないシャボン玉。だけど、夢の中の僕はとても大切そうに、それを見ていた――

目が覚めればそこにはうつそうと茂った森があった。

森からは鳥の囀りが聞こえ、きらきらした朝日の木漏れ日や、さらには今まで味わったことないような新鮮な空気まで肺に流れこんできた。

「ん、うーん。こんなに清々しい寝起きは久しぶりだなあ」

うん、と伸びをして改めて朝を満喫してみる。深呼吸をして、背伸びをして、そして頭がすっきり爽快になったところで、

「ここ、どこだろう?」

最も素朴な疑問を問いかけた。周りには誰もいなかったけど。後で夢かと思っておもいきり頬をつねってみたけど、やっぱり痛いだけだった。

「それにしても、いったい何でこんなことに」

『ここがどこか』ということもそうだが、僕には『何でここにいるか』という理由も分からなかった。

「誘拐?……にしては周りに人の影すらみえないし、こんな林道に放りっぱなしだし……第一無事じゃ済まないだろうしね」

じゃあ、いったいこんなところで寝てた理由は何なのだろうか?

もしかして夢遊病？ということも考えたが、こんな林道は近所では見たことがない。夢遊病なら、そこまで遠くに行くことは出来ないだろうからその可能性はないはずだ。

それからしばらく、あれこれ考えた結果、

「とりあえず、お腹すいたなあ……」

（食料確保のため）民家を探すことにした。

「家、見つけて電話借りよう。それで家族に連絡とれれば大丈夫でしょ。朝食のお金は……後で母さんに頼んでみるか」

そんな軽い気持ちで森の中の道を歩いていった。あとで自分がないでもないことに巻き込まれることも知らないで……

ブログ（後書き）

どうだったでしょうか？

今回はまだ本作品主人公である元春しか登場しておりませんが、次回からは東方のキャラも登場する予定です。

更新は定まらないかもしれませんが、次回もぜひ読みに来て下さい。

第一話 発覚した異変（前書き）

幻想郷の人々は春のある晴れた日をのんびりと過ごしていた。

そんな中、幻想郷にはとある異変が起こっていた。それに気付いた博麗霊夢や八雲紫らは、異変を抑えるために動こうとしたりしなかったりしていた。

第一話 発覚した異変

博麗神社にて

博麗神社の巫女、博麗霊夢はとあることで頭を悩ませていた。

「はあ……………」

「ん？どうしたの霊夢。ため息なんかついちゃってさ」

霊夢のらしくないため息を訝しく思ったのか、縁側で寝転がっていた萃香が顔を覗き込んできた。

「なんでもないわよ、なんでも」

その場を取り繕うかのようにぞんざいな返事をしたら、かえって萃香は納得してないようすだ。

それでも萃香の方も無理に聞いてくることはなく、「ふーん」と呟いて寝返りをうつただけだった。

（…まあ、どうしても話せないってわけじゃないんだけど。これ以上厄介事が増えるのは面倒なのよ）

今、幻想郷にはとある異変が起こっている。しかもこれはただの異変ではなかった。何せ今回は滅多に出て来ないあいつでさえも出てきているのだから。

（…！…早速か……噂をすればなんとやら、ね）

「あら、萃香も来てたの」

突如目の前の空間がぱっくりと割れ、割れ目の中から人が、にゅつとでてきた。

この出てきた人物こそ、おそらくこの異変について一番よく知っているだろう妖怪、八雲紫である。

「あれ、紫が外に出てくるなんて珍しいね？」

「ふふ、ちよつとそこのぐうたら巫女に用事があるのよ」

（誰がぐうたら巫女か！）

つい、言い返したい衝動に駆られたが、言い返したところで言いくるめられて、今度は何も言い返せないのが落ち。

口論では勝てないのは分かりきっている事なので、霊夢はお茶を啜ってやり過ごすことにした。大人な霊夢は決して平静を失ったりはしないのだ。

「いったい何の用事？」

と、萃香が尋ねると、紫はにっこりと柔らかい笑みを浮かべ、霊夢の腹部あたりをゆっくりと指差しながら、

「私たちの子供の様子を見に来たの」

「ブハッ——げほげほ——」な、なに言ってるのよ!？」

紫の思いがけない言葉に、大人なはずの霊夢は思わずお茶を盛大に吹き出してしまった。

「れ、霊夢……まさかそこまで二人の仲が進展していたなんて……！」

がたんと音がして後ろを振り返ると、萃香があまりの驚きで全身をわなわなと震わせていた。

「ちよつ、そこ！変な勘違いしないでよ！！」

「あらあ、霊夢は忘れちゃったの？三ヶ月前のあの日・コ・ト。あの夜はあなたも随分と激しかったじゃない」

「こんの……スキマ妖婆め！！変な嘘ばかり並べてんじゃないわよ！！！」

目の前でクスクスと笑っているこいつを、今すぐにもも葬り去りたかったが、（大きくなった）萃香に後ろから羽交い締めになされていたせいで、虚しく手足をジタバタさせることしかできなかった。

「大体、三ヶ月前って言ったら、あんたまだ冬眠してるじゃないの！！！」

「やあねえムキにしちゃって、冗談に決まってるじゃない。それとも、本当にしてほしかった？」

「うがー！！！」

「ほらほら、紫もその辺にしてあげなよ。それで、本来の用事つてのは？」

相変わらず紫に飛びついていきそうな霊夢を押さえ付けながら、このままではちががあかないと思つてか、萃香が先を催促した。

「そうね、そろそろ本題に入らないと。………じゃあ、悪いけど萃香、あなたちよつと席を外してくれないかしら」

「へ？………なんで？」

「いいから、」

紫がいつの間にか真剣な表情になっていた。その表情に何かを感じ取ったのか、

「ん、わかった」

そう言つて立ち去る萃香。その背中を見送りながら、すでに落着きを取り戻していた霊夢が尋ねた。

「ねえ、何で萃香にも何も言わないのよ？」

「何もつて？」

「異変のことよ。萃香、絶対に何かあるつて気になってると思うわよ。」

「あら、あなただってさつき『なんでもない』つて言つてたじゃない」

「私はこれ以上やっかい事を増やしそうな奴が増えるのが嫌だった
だけよ。もちろん、あんただけだね」

「ひどい事言うわね。私はこんなにあなたのことを愛しているのに
……」

そう言っただけで、霊夢のあごを軽く持ち上げる。紫
の顔が近づいてきたところで、霊夢はその手をぱしっと払いのけた。

「はいはい、もうそういう冗談はいいから」

「あら、私は本気よ？」

「あーまあ！！とにかく私はこれ以上騒ぎ立てられなくなっただ
け！

でも紫は別にどっちでもいいんですよ、じゃあなんでわざわざ萃
香を遠ざけたりしたのよ？」

いらいらして、早口でまくしたてた霊夢を見て、紫は何かを諦め
るような顔をした。

「……別にい、単にあなたと二人きりになりたかっただけよ？」

「イイカゲンニシナイト、殺スワヨ」

「冗談だつてば」

ついに霊夢が霊符を取り出して、周りにもどす黒いオーラが出始
めてきたので、紫も今度こそ諦めたようだ。

霊夢が落ち着くのを少し待って、紫は仕方なさそうにため息を一つついて、今度こそ真面目な表情で話しはじめた。

「…萃香に退席してもらったのは、情報が漏れるのを防ぐためよ」
「情報？」

「そう、今回は何と言っても博麗大結界での異変、つまり幻想郷そのものに異変が起きてるの。」

それに乗じて色々知られたら、後々面倒なことがあるでしょう？」

「さらに結界にちよっかいかけてくる奴が出てくるかも、ってこと？」

「そういうこと。幻想郷内で好きにやる分は私は構わない、……だけれど幻想郷自体を巻き込むなんて、この私が許さないわ」

（へえ……）

紫がここまで自分の気持ちをはっきり示すのは珍しい。

普段は何を考えているか分からなくて、最も油断ならない奴。だけれど、こんなにも幻想郷を大事に思っているのは他にはいないだろう。

直接口に出すのは絶対に嫌だけど、幻想郷を本気で愛してる紫は結構好きだったりする。

「それにしても、博麗大結界に異変だなんてね。全く予想だにしていなかったわ」

「そうね……まさか、」

「博麗大結界に穴があくなんて」

第一話 発覚した異変（後書き）

どうだったでしょうか。プロローグとは違って変わり、今回は霊夢の視点で物語を始めました。

プロローグの時点でどういう展開か読めた人もいるかもしれませんが、もしかすると二転三転と物語が進んで行くかもしれないので、諦めずについて来てくれると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9787i/>

東方夢遊伝

2010年10月21日20時35分発行